ひと

雑誌『保健室』の編集に携わる元養護教諭

石田（いしだ）かづ子（こ）さん（66）

「『保健室の先生はひまだから』って子どもは相談していくけど、ひまなふりをするのよ。『保健室の先生』が忙しかったら子どもは話しかけられないもの」

次から次に、保健室で出会ってきた子どもたちのエピソードが語られます。学校を退職してからも、学童保育や障害児の児童デイサービスなどで子どもにかかわり続けています。

保護者が深刻な相談をしていくことも。「先生、ここにくるとほっとする」といわれることが、自身を癒やします。

学校の保健室は特別な空間です。けがやからだの不調だけでなく、教室でのできごとや家庭でのあれこれを「先生になら」と打ち明けていく子どもたち。「問題行動」の後ろに隠されている子どもたちの傷つき、虐待や性の問題…。

「それらに、子どもの心とからだを守る人として立ち向かう。それが養護教諭の専門性なんですよ」。競争にとらわれ、子どももおとなも学校も追い詰められているなかで、今「保健室」の役割はますます大事といいます。

全国の「保健室の先生」をつなげる雑誌『保健室』の編集に携わって20年。「こんな世の中だからこそ、養護教員だけでなく学童保育の指導員、保育士や保護者ら子どもにかかわる幅広い人々にもっともっと読まれたい」と力を込めます。

子どもは地域で生きています。「地域に、子どもたちの生きるよりどころをつくらなければ」とにっこり。

文・写真　荻野　悦子